

エスエス企画 [写真スタジオ]

SS KIKAKU

DreamLabo 5000 導入以降、お客さまからの評価が非常に高くなった。
自社でフォトグラファーを抱え、企画から撮影、出力、製本まで
一貫した提案・製作が行なえる強みを活かしていきたい。

CLIENT Interview

DreamLabo 5000



株式会社エスエス企画は、1978年に設立された建築写真の撮影やアルバム・フォトブック製作を中心に、写真、映像に関するさまざまなサービスを展開する会社です。全国主要都市に拠点をもち、グループ会社である株式会社エスエスとともに、建築写真の分野では高い知名度を誇っています。

2013年12月、株式会社エスエス企画はそれまで主力だった銀塩機に代わり、インクジェット印刷機・DreamLabo 5000 にリプレイス。

写真表現のプロフェッショナルとして、株式会社エスエス企画は、DreamLabo をどのように評価し、どう活用しているのでしょうか。導入の経緯から運用面でのメリット、今後の可能性について、代表取締役社長 後藤良明さん、専務取締役 営業部長 国際事業部長 太田和正さん、制作部 チーフディレクター 森教郎さん、制作部リーダー・デジタルフォトレタッチャー 宮崎守さん、制作部 梅津将志さんの5名にお話を伺いました。

— 2013年にDreamLaboを導入された、当時の状況ときっかけについて教えてください。

太田 ● 導入前は銀塩タイプのいわゆるミニラボ機がメインです。ポジ用とネガ用、それぞれに適した銀塩機を備えていた時期もありますし、フィルムのサイズに合わせてスキャナを使い分けていた時期もありますが、撮影側がデジタルに変わりワークフローが整理されたことで、出力機のリプレイスが検討しやすくなりました。銀塩機は技術

的な進化がほぼ止まっていたから、銀塩機の先を考えてDreamLaboを検討しはじめたというのが導入のきっかけですね。いまは主力の出力機をDreamLaboに一本化しています。

— DreamLaboのプリントをご覧になったときの印象はいかがでしたか。また、導入後に感じたメリットについて教えてください。

太田 ● 確実に銀塩よりきれいだなというのが正直な第一印象でした。建築物は縦横のラインや構成材であるタイルの質感をしっかりと出す必要があるのですが、銀塩機ではモアレやジャギー、デジタルデータ特有の筋や環が出てしまうことがありました。DreamLaboのプリントはそうした再現の不備がなく、リアルに再現できるのも大きなポイントでした。

森 ● 銀塩機はDreamLaboに比べると出力解像度が低いので、モアレやジャギーが出る部分をぼかす必要があったんですね。それは建築写真に限らず、着物の絵柄やウェディングドレスの模様の再現でも同様の課題を抱えていました。フォトグラファーがどれだけ努力しても、銀塩機では潰れてしまって正確な再現ができなかった部分がDreamLaboならしっかりと出せる。その精密な描画力が一番評価できる点だと思いますし、いまのお客さまに評価されているところだと感じています。

宮崎 ● 写真だけでなく、文字やイラスト、建築図面の描画でもその差は歴然です。

後藤 ● クライアントが建築写真家に求めている描画力を再現する事に、DreamLaboはすぐれている。それがいま、クライアントの声として私どもに届いています。

— DreamLabo導入によって効率化された点はどのようなところでしょうか。

宮崎 ● 管理面でのメリットでは、銀塩機のように朝と晩で色が違うというような色の変化がなく、1枚でも100枚でも、1ヶ月後でも1年後でも同じ色を出せること。印刷のズレもないことが大きいですね。

梅津 ● DreamLabo導入以前は、フォトブック出力のためにトナータイプのオンデマンド機を使用していた時期もあったのですが、表裏見当の精度がそこまで高くありませんでした。DreamLaboは両面印刷ができるうえに表裏のズレもない。製本工程上、これは非常に高く評価できるポイントです。また、商品ラインナップとしてもこれまではないサイズの商品を展開できるようになりました。

銀塩機の頃は小さいモニタを見ながらカラーキーで調整をしていましたが、ディスプレイで見ている色がそのまま出せるDreamLaboは、色の調整の手間という部分でも効率的ですね。

森 ● 単純な用紙代などで考えれば銀塩機のほうが安かったと思いますが、プリントの速さ、色の安定性、検討精度が高く、両面印刷できることによる工程数の減少などによって、トータルで見ればDreamLaboのほうが安い。人件費が一番高いですからね。

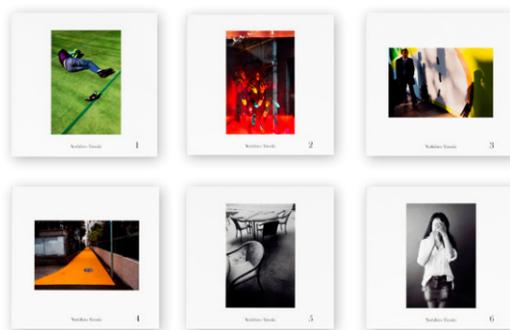
— DreamLaboの色についてはどのように評価されていますか。

森 ● 色のあざやかさはもちろんですが、特に評価しているのはシャドウ部の描画です。銀塩機に比べて調整をしなくてもしっかりと再現されます。**宮崎** ● きちっと黒がしまっているけれど、ディテールも出ている。銀塩の頃はあり得ないことです。建築写真では暗部のディテールを表現する必要がありますがあるケースが多いので特に喜ばれますね。

森 ● DreamLaboはデジタルデータさえきれいな



「写創工房」商品のひとつ「ZINE999」。税込1冊999円からつくれるコストパフォーマンスの高さが魅力



“Yoshihiro Tatsuki” No.1-6

仕様：並製本(W200×H192mm)
用紙：光沢タイプ/36ページ
販売価格：各 3,200円
「写創工房」で展開されている写真家向けサービスには立木義浩さんなど、著名な写真家が参画している

につくってあれば、その通りに出ます。打掛やドレスの色がくすむことなく、レースやフリルもきちっと出せるので、お客さまにも非常に喜んでいただいています。

— DreamLaboの用紙についてはどのように評価されていますか。おもに使われている紙は何でしょうか。

太田 ● 1枚1枚プリントを焼いて手で貼るプリントには光沢タイプ、フォトブックにはマットタイプ、安く大量につくりたいというニーズには両面サテンタイプと、3種類をバランスよく使っています。

森 ● なかでも一番よく使われているのはマットタイプですね。

宮崎 ● マットタイプは一番柔らかく、加工がしやすいですね。傷もつきにくいので、製本工程でのロスも少なくて済みます。

— 建築写真のほか、写真家や個人向けに「写創工房」に展開されていますが、どのような経緯で始められたのでしょうか。

太田 ● もともと「A-book」というフォトブックのラインがあり、「写創工房」はそのDreamLabo版として展開しているものです。一般向けにもサービスを公開したのは、DreamLabo導入によってプリント出力の余力が銀塩の時代よりも増えたため、従来のプリント業務に使用するだけではもったいない。DreamLaboの余力を活かすかたちで始めたのが一般向けの「写創工房」です。

現在は8割がプロの写真家で一般の方からも問い合わせをいただいています。

後藤 ● 「写創工房」は、DreamLaboの品質を広く一般のお客さまへ広げる為の大事なツールです。私どもに届いているお客様の声を反映し改良を行い、より良いものをご提供してゆきたいと考えております。

— DreamLaboを今後、どのように活用される予定ですか。

太田 ● DreamLaboは少数で本当に高品質なものが望まれているジャンルに最適な印刷機です。そうすると、ある程度ジャンルは限られています。ひとつは建築やブライダルのような、予算規模のある成果物。あるいは、画集『INORI』のようなコレクターアイテムです。そうした分野はまだまだ開拓の余地があるんじゃないかと思っています。ブライダルに関しては建築以上に競争が激しいジャンルですから、単独で販売チャンネルを開拓することは難しいかもしれませんが、出力と製本を担当するセンターラボとして、BtoBで動いていくことも視野に入れて動いていきたいですね。

後藤 ● DreamLaboを導入して以降、描写力に対するお客さまからの評価が高くなったと感じています。自社でフォトグラファーを抱え、企画から撮影、出力、製本まで一貫した提案・製作が行なえるのが弊社の特徴です。その強みを活かして、建築以外の分野にも積極的に取り組んでいく。それが弊社の成長戦略と考えております。



画集『INORI』

監修・イラスト:redjuice / デザイン:有馬トモユキ
印刷・製本:エスエス企画
仕様:表紙アクリル貼り特殊製本(W374×H257mm)
PPスリーブケース付き
用紙:ラスタータイプ / 販売価格:15,000円

後藤良明
Yoshiaki Goto
株式会社エスエス企画
代表取締役社長

太田和正
Kazumasa Ota
株式会社エスエス企画
専務取締役
営業部長 国際事業部長

森教郎
Norio Mori
株式会社エスエス企画
制作部
チーフディレクター

宮崎守
Mamoru Miyazaki
株式会社エスエス企画
制作部リーダー
デジタルフォトレタッチャー

梅津将志
Masashi Umetsu
株式会社エスエス企画
制作部

株式会社エスエス企画 / 東京都渋谷区・愛知県名古屋市北区。建築写真の撮影およびアルバム・写真集製作を中心に、画像・映像に関連したさまざまなサービスを展開。メインはBtoBだが、近年は「写創工房」のようにBtoC向けのフォトブックサービスも。フィルム時代、銀塩プリント時代から脈々と受け継がれてきた企画力・撮影力・制作力を活かし、さまざまなジャンルに挑戦している。